



応用生態工学会ニュースレター  
Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)

No.48

2010 (平成 22) 年 6 月 11 日 (金) 発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405 号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: ecjes-manager@ecjesj.com HP: http://www.ecjesj.com/

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 藤田光一, 事務局長 仮谷伏竜)

|     |                              |    |
|-----|------------------------------|----|
| 1   | はじめに .....                   | 1  |
| 2   | 理事会・幹事会報告 .....              | 1  |
| 3   | 委員会 新体制について .....            |    |
| 4   | 海外学会派遣員の募集 .....             | 4  |
| 5   | 国際ワークショップ開催報告 .....          |    |
| 6   | 行事予定 .....                   | 5  |
| 6.1 | 第 2 回フィールドシンポジウム in 仙台 ..... | 10 |
| 6.2 | 淡水魚保全シンポジウム .....            | 11 |
| 6.3 | 沖縄フィールドシンポジウム .....          | 11 |
| 7   | 編集後記: 事務局から .....            | 12 |

別紙 第 14 回札幌大会開催概要, 参加申込書

## 1 はじめに

2010 年度に入り, 当学会の地域研究会の行事予定も決まって参りました. 今年の札幌大会 (9 月 21~24 日) の参加申込み, 研究発表 (口頭・ポスター) への申込み受付の他, 国際交流委員会からの「海外学会派遣者の募集」も開始致しました.

5 月 13-14 日に名古屋 COP10 に向けて開催した国際ワークショップ「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ」も, 3 名の海外招聘者・国内の研究者による講演・討議を経て, 「学会からのアピール文」を採択し, 参加頂いた会員・学会関係者等から多くの賛同・評価を頂きました. 今後は, 採択したアピール文について, 関係機関への情報の提供と連携強化を進め, より深い COP10 の議論に資するよう活動して参ります.

## 2 理事会・幹事会報告

本年 2 月に第 43 回幹事会, 3 月に第 52 回理事会が開催されました. 理事会での報告及び検討内容を主体として報告します.

| 役員会開催状況                                        |
|------------------------------------------------|
| 第 43 回 幹事会<br>平成 22 年 2 月 25 日 (木) 13:00~15:00 |
| 第 52 回 理事会<br>平成 22 年 3 月 25 日 (木) 13:00~15:00 |

### 第 52 回 理事会

- ・日時: 平成 22 年 3 月 25 日 (木) 13:00~15:00
- ・場所: (財) ダム水源環境整備センター  
3 階第 1 会議室
- ・出席者: 近藤会長, 谷田副会長, 池淵副会長, 井上理事, 風間理事, 関根理事, 玉井理事, 辻本理事, 山本理事, 渡辺理事, 藤田幹事長  
事務局: 仮谷事務局長

### 1 報告事項

#### (1) 平成 21 年度 収入支出見込み

平成 21 年度の事務局収入・支出状況 (3 月 24 日時点) が報告された.

平成 21 年度の収入見込みは, 予算収入を 90 万円ほど超える見込みである. 支出見込みでは, ほぼ予算通りとなっている. 今後の賛助会員からの振込状況や, 地域口座の集計などの不確定な要素はあるが, 全体の収支予測では, 80 万円程度の黒字となる. 平成 21 年度決算 (確定値) については, 次回理事会で報告される.

また理事会からは, 以下 3 点の指摘があった.

- ・普及・連携委員会は、平成 21 年度のフィールドシンポジウムを実施した効果について、委員会による自己評価を行い報告すること。
- ・平成 22 年のフィールドシンポジウムを含む普及・連携委員会の活動は、地域への助成の試行も含めて年度予算内（委員会 2 回分）で実施すること。
- ・平成 23 年度予算は、委員会支出等の実態をよりの確に反映させて編成すること。

## (2) 委員会担当理事について

第 51 回理事会において、「委員に理事を含まない場合、委員会の担当となる理事を 1 人配置すること」となり、調整の結果、以下の担当理事が決定した。

| 委員会名      | 担当理事          |
|-----------|---------------|
| 会誌編集委員会   | 島谷幸宏理事、山本晃一理事 |
| 普及・連携委員会  | 辻本哲郎理事        |
| 国際交流委員会   | 中村太土理事        |
| 情報サービス委員会 | 風間ふたば理事       |
| 将来構想委員会   | 谷田一三副会長       |

## (3) 各委員会の目的・役割について

「委員会の目的と事業（役割）案」が提案され、これを各委員会で確認した上で、ニュースレター・ホームページに掲載し、会員に周知していくこととなった。

## 2 審議事項

### (1) 応用生態工学会 技術援助委員会（仮称）の設置について

前回理事会での審議・指示内容を受け、第 43 回幹事会で討議した「技術援助委員会（仮称）」の設置が提案された。

提案において技術援助委員会（仮称）は、学会規約第 4 条に定める応用生態工学に関する国内外の調査・研究活動に関する技術援助を行う

とされている。審議の結果、技術援助委員会（仮称）の設置が承認され、委員会名称や基本方針、活動の在り方について委員会内で検討し、定めていくこととなった。

委員長には、辻本理事が推薦され会長より委嘱された。4 名の委員人選は辻本委員長に一任され、会長がこれを委嘱することで承認された。

### (2) 次期中期計画骨子(案)について

幹事会での修正を踏まえた次期中期計画骨子(案)についての説明に対し、中期計画として取り組むべき視点・方向性として、以下の意見があった。

- ① 4 年後にどのような学会となっているべきか、具体的なイメージを持つことが重要である。学会員の増加に向けた具体策や学会収入源の確保として、たとえば教科書の作成等を検討し、位置づけていくなど、具体的なやり方を詰めていく必要がある。
- ② 各委員会の目標（骨子文）の記述には、当学会を取り巻く現状・動向を把握し、応用生態工学の国内・外での重要性・分野の発展性を踏まえた記載としたり、具体的な数値目標を示した記述が望ましい。

## 第 43 回 幹事会

・日時：平成 22 年 2 月 25 日（木） 13:00～15:00

・場所：（財）ダム水源地環境整備センター

3 階第 2 会議室

・出席者：藤田幹事長、西副幹事長、五味幹事、坂之井幹事、関島幹事、山本幹事、仮谷事務局長、関根次長

（事前意見提出：2 名）

### 1 報告事項

（第 52 回 理事会報告 参照）

### 2 審議事項

## (1) 応用生態工学会 技術援助委員会(仮称)の設置について

技術援助委員会(仮称)を設置するという方向は良い。その上で、応用生態工学会として、もっと本格的に委員会の在り方、具体的な活動イメージを想定し、戦略的に発展していけるよう提案していくことが大事である。こうした観点から、幹事会が、委員会活動をどのように支えて参画していくのか、委員会の基本方針の項目について意見を集約し、委員会内での議論に役立てるように提案していく。なお委員会名称は、実際の活動形態に近い名称となるよう、委員会で決めて頂くことを併記する。

## (2) 次期中期計画骨子(案)について

「応用生態工学とは、生態学と土木工学の境界領域の新しい理論・知識技術体系である」という認識がまだ十分浸透してなく、また「河川分野の学会」というイメージを持つ研究者もいる。

応用生態工学会が、その元来の目的である幅広い様々な分野を対象とした発展を達成していけるよう、幹事会として何を目標としどう活動していくべきか、より具体的に検討していくことを理事会に報告して行く。

次期中期計画の最終案は 9 月の第 14 回総会で発表されるというスケジュールが設定されている。このため幹事会は、具体項目の検討・分析を進め、将来構想委員会に確認・調整しながら 6 月の理事会、あるいはその後のメール形式での理事会に諮り最終案を策定していく。

## 3 委員会 新体制について

### 3.1 応用生態工学会誌編集委員会

応用生態工学会誌編集委員会は、2010 年度より森編集委員長による新体制でスタートしました。第 49 回理事会(2009 年 9 月 26 日)の指摘・承認の通り、専門編集委員制度は 2009 年度末で廃止されました。

#### 応用生態工学会誌編集委員会

|      |                    |
|------|--------------------|
| 委員長  | 森 誠一(岐阜経済大学)       |
| 副委員長 | 角野 康郎(神戸大学)        |
| 委員   | 浅枝 隆(埼玉大学)         |
|      | 東 信行(弘前大学)         |
|      | 池内 幸司(国土交通省河川局)    |
|      | 井上 幹生(愛媛大学)        |
|      | 大野 啓一(横浜国立大学)      |
|      | 加賀谷 隆(東京大学)        |
|      | 鎌田 磨人(徳島大学)        |
|      | 小出水 規行((独)農村工学研究所) |
|      | 島谷 幸宏(九州大学)        |
|      | 角 哲也(京都大学)         |
|      | 西 浩司(いであ(株))       |
|      | 西廣 淳(東京大学)         |
|      | 風呂田 利夫(東邦大学)       |
|      | 星野 義延(東京農工大学)      |
|      | 松井 正文(京都大学)        |
|      | 水谷 正一(宇都宮大学)       |
|      | 安田 吾郎(国土交通省河川局)    |
|      | 柳井 清治(石川県立大学)      |
|      | 山室 真澄(東京大学)        |
|      | 山本 晃一((財)河川環境管理財団) |

※任期：2010 年 4 月 1 日～2012 年 3 月 31 日(2 年間)

※編集幹事、委員については、今後の会誌編集を進めていく中で委嘱・拡充していく。

### 3.2 技術援助委員会の設置

第 52 回理事会において、設置が決まった技術援助委員会(委員長：辻本哲郎理事)の委員委嘱が完了しました。

技術援助委員会は、学会規約第 4 条に定める応用生態工学に関する技術援助を実施し、応用生態工学に関する調査・研究活動の促進を図り、当学会の目的の達成に貢献していくことを目的とし、今後、活動を実施して行きます。

**技術援助委員会**

委員長：辻本哲郎(名古屋大学)  
委員：江崎保男(兵庫県立大学)  
島谷幸宏(九州大学)  
中村太士(北海道大学)  
山室真澄(東京大学)

※任期：2010 年 4 月 1 日～2012 年 3 月 31 日 (2 年間)

## 4 海外学会派遣員の募集

### 国際交流委員会

応用生態工学会・国際交流委員会（五味高志委員長）では、2010 年度の海外学会等への派遣者を募集しています。募集要領の概略は以下の通りです。詳細は、学会ホームページをご確認の上、事務局まで申込下さい（2010 年度助成総額は 30 万円）。

#### 【海外学会等への派遣者募集要領】

##### (1) 目的

自然環境と開発の問題については、我が国だけに限らず多くの国々で関心が持たれ、様々な研究と実践的な試みが行われて来ている。応用生態工学を発展させるためには、こうした海外での活動に積極的に係わり参加することによって、情報を得ながら、人的交流を図ることが求められている。

応用生態工学会では、ここに会員から希望者を募り、「派遣研究員」を審査選考して、当該年度に海外で開催される応用生態工学に関連する学会・シンポジウム・国際会議等に派遣し、その内容を全会員に報告するものである。

##### (2) 選考

###### 1) 資格

- ① 応用生態工学会の正・学生会員であること（募集開始時点で会員でなくても、会員となることを条件として応募可能とする。）
- ② 学生あるいは 35 歳未満の大学・研究機関研究者、技術者

##### 2) 派遣研究員の選考

- ① 2010 年度は、学会としての助成総額を 30 万円とし、開催内容・派遣先等を考慮して、派遣研究員数・個別助成費用を決定する。
- ② 選考にあたっては国際交流委員会において書類審査を行い、候補者を選定した上で理事会において決定する。
- ③ 助成費用の支給対象とならなかった場合でも、応募者の資格や開催内容・派遣先を考慮して適、費用の助成をしなくても「派遣研究員」として認めることが出来るものとする。ただし、当人は辞退できる。

##### (3) 申込み申請書：

派遣希望者は、学会ホームページを確認の上、会員番号、氏名、所属、連絡先（〒・住所・TEL・FAX・E-mail）、年齢、男女、専門分野、希望派遣学会等（開催会議等の名称、主催者名、開催月日、開催国・地名、会議等の目的・内容、現地見学会の有無と内容、参加申し込み期限、参加費、研究発表を行うか否か、案内パンフ等がありましたらそのコピーをお送り下さい）、および派遣希望理由（選考基準参照のこと）を、A4 計二枚以内（書式自由）にまとめ、郵送・FAX・E-mail 等にて事務局に申し込み下さい。

##### (4) 申込期限：2010 年 7 月 9 日（金）事務局必着

##### (5) 派遣決定時期：2010 年 7 月下旬（予定）

※詳細は、学会ホームページをご確認ください

<http://www.ecesj.com/J/index.html>

## 5 国際ワークショップ開催報告

「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ」～COP10 名古屋に向けて～

田代 喬 (名古屋大学大学院環境学研究科)

仮谷 伏竜 (応用生態工学会 事務局)

### はじめに

2010 年 5 月 13 日, 14 日の両日, 「国際ワークショップ: 生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ (International Workshop: Ecosystem-Science & -Engineering Approach toward Conservation of Biodiversity)」が名古屋国際会議場・白鳥ホールにて開催されました。

本ワークショップは, 来る 10 月に名古屋国際会議場で開催される生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP10) に向け, 応用生態工学会からのアピールを採択することを目的とし, 流域圏 (River Basin Complex) における「景観・生息場の保全 (Habitat Mosaic Restoration)」, 「水・物質フラックスネットワークの健全化 (Flux Network Restoration)」, 「都市の責任 (Responsibility of Metropolitan)」をテーマとして行われたものです。本稿では, これら 3 テーマに沿った国内外からの話題提供を含む講演内容について概要を紹介した後, パネルディスカッションにおける討議を経て最終的に取り纏められ, 採択されたアピール内容について報告いたします。

本会議は「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ」国際ワークショップ実行委員会 (下記「国際ワークショップ実行組織」参照) が主催し, 関係諸機関の後援, 連携協力を得て (下記「後援, 連携協力機関」参照), 応用生態工学会, 日本生態学会, (社) 土木学会の共催により実施されました。開催に当たり, 応用生態工学会 (兼土木学会), 日本生態学会, 愛知県, 名古屋市, COP10 支援実行委員会の代表者の方々には, それぞれご祝辞をいただきました。また, 会議の準備, 運営に際しては, 河川整備基金 ((財) 河川環境管理財団), (財) ダム水源地環境整備センター, (社) 中部建設協会からご助成いただき, 各セッションを担当されたコーディネーターの方々を始めとする上記実行委員会の委員諸氏, 応用生態工学会名古屋のメンバー諸氏には多大なご支援, ご協力をいただきました。ここに記して関係各位に厚く御礼申し上げます。

### プレ・エクスカーショント報告

国際ワークショップ実施に先立ち, 5 月 12 日に海外・国内の講演者等を対象とした伊勢湾流域圏のプレ・エクスカーショントを実施しました。

長良川河口堰, 木曽三川下流の干潟, ケレップ水制, 木曽三川公園, 海津市歴史民俗資料館, 津屋川ハリヨ生息地, 長良川・堀川合流部の水質浄化施設, 木曽川中流等に立ち寄り, 現場毎に細やかな説明と活発な質疑応答が行われ, 伊勢湾流域圏の現状, 歴史・文化的背景を踏まえて国際ワークショップに望みました。

### 【プレ・エクスカーショント写真】



海津市歴史民俗資料館 金廻四間門樋



津屋川ハリヨ生息地



木曽川中流

## 会議内容

### (1) 基調講演 (題目／演者)

- Crisis of Biodiversity in Local and Global Scale／Kazumi TANIDA (Osaka Prefecture University)
- Challenges of Ecosystem-Science & -Engineering toward Conservation of Biodiversity／Tetsuro TSUJIMOTO (Nagoya University)

基調講演では Introductory Lecture として、生物多様性を取り巻く現状の問題、本ワークショップの趣旨を解説する 2 件の講演がありました。谷田一三教授（大阪府立大学）からは、水生昆虫を含む無脊椎動物や魚類などの淡水生物、特に日本と世界各所における地域固有種について、その近縁種の全球的な広がりを与えて紹介した後、人為的な環境変化によってこれらの固有種が絶滅に瀕し、生物多様性が危機にさらされている現状が報告されました。辻本哲郎教授（名古屋大学）からは、応用生態工学会設立の背景・経緯が紹介された後、複数の流域と内湾からなる伊勢湾流域圏をフィールドとする新たな環境影響評価の枠組みを事例としながら、本ワークショップのテーマである「景観・生息場の保全」、「水・物質フラックスネットワークの健全化」、「都市の責任」の重要性とこれらの相互関係について説明がありました。

### (2) セッション A：景観・生息場の保全 (題目／演者)

- Reconnecting Large River and Floodplain Habitats for Conservation of Biodiversity: Examples from the Lower Missouri River／David GALAT (University of Missouri)
- Shifting Mosaic in Maintaining River-floodplain Ecosystem and its Degradation in Japan／Futoshi NAKAMURA (Hokkaido University)

セッション A では、流域における生息場はさまざまなつながり (linkage) の中で成立しているという整理に基づき、水生生物や河川－氾濫原生態系からみた「つながり」に着目した 2 件の話題が提供されました。David GALAT 博士（ミズーリ大学）からは、ミズーリ川流域をフィールドとした河川と氾濫原における横のつながり (lateral linkage) に着目し、これらを物理的に接続させるだけでなく、氾濫原を利用する水生生物の生活史を持続させる役割も含めて、氾濫原に水が流入する洪水の規模、頻度と時季の重要性が示されました。中村太士教授（北海道大学）からは、主に北海道におけるフィールド研究の成果から、氾濫原における lateral linkage が植物群落構造に及ぼす影響や河道内の lateral linkage が底生動物の群集構造に及ぼす影響について、ダムの建設による河道地形の変化やより直接的な河川改修といった人為的地形改変と関連付けて分析された結果が示されました。

### (3) セッション B：水・物質フラックスネットワークの健全化 (題目／演者)

- The Significance of Reestablishing Historical Hydrologic Conditions to Restoration of the Kissimmee River, Florida, USA／Lawrence GLENN (South Florida Water Management District, the State of Florida)
- Importance of Developing a Practical Framework to Integrate Local Restoration Efforts with River Basin Complex Management: Taking the Ise Bay River Complex Case as an example／Koichi FUJITA (National Institute for Land and Infrastructure Management, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism)

流域圏における水・物質フラックスネットワークの修復は、生物多様性の再生には欠かせない一方で、対象とするネットワークの広範さなどからその実現には困難が伴います。セッション B ではこうした問題に対する話題が提供されました。Lawrence GLENN 博士（フロリダ州南フロリダ水管理公社）からは、蛇行した河川の捷水路化（直線化）と流量制御によって失われた氾濫原湿地の修復を目的とする、フロリダ州キシミー川の自然再生事業について、その計画、実施、検討、対処の各段階におけるさまざまな取り組みとともに、

事業成功に至ったプロセスが紹介されました。藤田光一博士(国土交通省国土技術政策総合研究所)からは、伊勢湾流域圏における水・物質フラックスの変化とそれに伴う環境変化について、経済成長に伴う産業活動の活性化による流域からの汚濁負荷の増加、ダム等の建設による水・土砂フラックスの変化などのさまざまな要因を整理した結果が報告され、これらの複合的な関係を分析し、総合的に環境を保全するうえで、流域圏全体の水・物質フラックスネットワークの重要性が示されました。

#### (4) セッションC:都市の責任(題目/演者)

- The Challenge of Toyota City: Initiative toward the Conservation of Biodiversity in the Yahagi Basin/Kohei SUZUKI (Toyota City)
- The Achievement and the Future Prospect of Sustainable Development in Mersey Basin: The Role of Mersey Basin Campaign/Walter MENZIES (Mersey Basin Campaign)

都市における活動は、これまでに生物多様性を喪失させてきた一方、都市を含む流域圏のつながりなどを再生することにより、今後の生物多様性を保全する能力を保有しています。セッションCでは、流域圏管理における行政・市民の協働体制に着目した国内外の事例が報告されました。鈴木公平氏(豊田市長)からは、豊田市の大部分を占める矢作川流域における森林、農山村、河川を守る環境意識の高いNPOのさまざまな活動が紹介された後、「交通」・「産業」・「森林」の3つの領域について、環境と暮らしの技術によりこれらを融合しながら、行政、NPOが連携して取り組む環境政策「ハイブリッドシティ」構想が説明されました。Walter MENZIES氏(マージー川流域キャンペーン)からは、イギリスの都市部を流れるマージー川を対象として、流域における河川水質の向上、魅力的な水辺の創生、水路や水辺環境への意識向上を目的とし、経済の再興をも目指した行政・市民・企業が連携したマージー川流域キャンペーンの取り組みとその成功へ至った経緯が紹介されました。

#### (5) ケーススタディ

流域圏での生物多様性保全に関する取り組みを募集して実施されたケーススタディでは、下記「ポスター発表」に示す15件の事例発表がありました。これらはおおまかに、「伊勢湾流域圏研究プロジェクト」の7件、「その他の伊勢湾流域圏における研究活動」3件、「伊勢湾地域における災害」1件、「中国、韓国における事例」2件などに区分され、韓国の四大河川自然再生プロジェクト(下記「ポスター発表」P-20)についてDVD上映を交えた口頭発表の後、それぞれのポスターの前で活発な質疑応答が行われました。

#### (6) パネルディスカッション〜総括:アピール採択

パネルディスカッションでは、上記の話題提供者から辻本教授、GALAT博士、中村教授、GLENN博士、藤田博士、MENZIES氏とセッションCの企画運営を担当された萱場祐一博士((独)土木研究所)の合計7名が登壇され、各セッションにおける概要をまとめられた後、それぞれのテーマの視点から会場の意見も交えて、「生物多様性保全に向けた応用生態工学会からのアピール(An Appeal from the Ecology and Civil Engineering Society)」について討議が行われました。

ここでの討議から、本ワークショップの成果として取り纏められた文書を下記「生物多様性保全に向けたアピール:行動計画」に転記いたします。和文訳は付記しませんが、本ワークショップチラシ([http://www.ecesj.com/J/events/2010/ECES\\_WS20100513\\_J3.pdf](http://www.ecesj.com/J/events/2010/ECES_WS20100513_J3.pdf))に掲載のアピール(案)も併せてご参照いただければと思います。

## おわりに

本ワークショップは、生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP10) に向け、応用生態工学からのアピールを採択することを目的としたものです。流域圏における「景観・生息場の保全」、「水・物質フラックスネットワークの健全化」、「都市の責任」をテーマとする国内外の一線級の専門家（行政、研究、技術、実務など）による話題提供と一般参加者を交えた討議により、生物多様性保全に向けた応用生態工学会からのアピール（案）を採択することができました。

2 日間を通じて延べ 190 名の方々（内訳：大学・研究機関 76 名；行政機関 53 名；民間企業 40 名；その他団体（財団法人など）19 名；報道機関 2 名）にご参加いただくことができました。各セッション、パネルディスカッションを通じて、討議の時間は必ずしも十分に長く確保できませんでしたが、同時通訳機器を導入したことにより、一般の参加者の方々にもより積極的に関与いただくことができ、盛況のうちに幕を閉じることができたように思います。末筆ながら、会議運営の担当者として、ご参加いただいた全ての方々に御礼申し上げます。

## 記

### 【国際ワークショップ実行組織】

顧問：橘川次郎（クィーンズランド大学名誉教授）、近藤 徹（東北電力株式会社常任顧問）、  
山岸 哲（山階鳥類研究所名誉所長）

実行委員会：辻本哲郎（委員長、名古屋大学）、池淵周一（（財）河川環境管理財団）、  
江崎保男（兵庫県立大学）、萱場祐一（（独）土木研究所）、  
島谷幸宏（九州大学）、清水義彦（群馬大学）、  
竹村公太郎（（財）リバーフロント整備センター）、  
谷田一三（大阪府立大学）、戸田祐嗣（名古屋大学）、  
中村太士（北海道大学）、福田晴耕（（社）中部建設協会）、  
藤田光一（国土交通省）、森 誠一（岐阜経済大学）、  
森下郁子（（社）淡水生物研究所）、山本晃一（（財）河川環境管理財団）、  
渡辺和足（（財）ダム水源地環境整備センター）（敬称略、五十音順）

### 【後援機関】

国土交通省、農林水産省、愛知県、名古屋市、（財）リバーフロント整備センター、  
（財）ダム水源地環境整備センター、（財）河川環境管理財団、（社）淡水生物研究所、  
（社）中部建設協会、応用生態工学会名古屋、名古屋大学名古屋流域圏水理研究院

### 【連携協力機関】

文部科学省科学技術振興調整費「伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発」研究グループ、生物多様性条約第 10 回締約国会議支援実行委員会



【ポスター発表】

**I : Ise-Bay River Basin Research Project (P-01~08)**

- P-01, 02: Research and development in assessment and restoration for eco-compatible management of river basin complex around Ise bay  
(Tetsuro TSUJIMOTO [Nagoya Univ.] )
- P-03: Comparison between forest ecosystem services and its artificial consumptions in the Yahagi river basin  
(Makoto OOBA [National Inst. Env. Studies])
- P-04: The role of paddy field water areas for fishes  
(Akiko MINAGAWA et al. [National Inst. Rural Engrg.] )
- P-05: Population viability analysis of a migrating crustacean species for conservation of its habitat network  
(Masatoshi DENDA et al. [Public Works Research Inst.] )
- P-06: Habitat utilization of the amphidromous freshwater shrimp *Caridina leucosticta* in agricultural drainage channels connected to the Furu River, Aichi, central Japan  
(Kazuyoshi NAKATA et al. [Public Works Research Inst.] )
- P-07: Function of Brackish Lake Aburagafuchi to reduce pollution loads from half-urbanized basin to Ise Bay  
(Saori AKIMOTO et al. [Public Works Research Inst.] )
- P-08: Seasonal change of horizontal larval distribution patterns of Asari clam (*Ruditapes philippinarum*) in Ise Bay: 2008-2009.  
(Nariaki INOUE et al. [Fisheries Research Agency] )

**II : Research Activities in Ise Bay River Basin Complex (P-09~11)**

- P-09: Relationship between water quality of irrigation ponds and environmental factors in Chitahanto Peninsula, Central Japan  
(Toshikazu KIZUKA [Nagoya Univ.] )
- P-10: Ecological understanding of changes in river-floodplain systems  
(Junjiro. N. NEGISHI et al. [Hokkaido Univ.] )
- P-11: Environmental conditions affect winter fish assemblage structure in backwaters of the Kiso River  
(Manabu KUME et al. [Aquatic Restoration Research Center] )

**III : Enlightenment (P-12)**

- P-12: Activities of the Ecology and Civil Engineering Society, Nagoya  
(ECES Nagoya)

**IV : Disaster history of Ise bay area (P-13~17)**

- P-13~17: Posters of historical disasters in the Ise bay area & posters of Hurricane Katorina  
(Public Assoc. Chubu Region Construction Service)

**V : Case studies in China & Korea (P-18~20)**

- P-18, 19: DongTan Wetland of Chongming Island, Shanghai: An Approach for Restoration of the Ecological Environment with Ecotourism  
(Takashi TASHIRO [NHRI] )
- P-20: The Four Major Rivers Restoration  
(Seung Kyum KIM [Advisory Committee of the 4 Major Rivers Restoration in Korea] )

**VI : Interdisciplinary scientific activities between biology & civil engineering (P-21)**

- P-21: Information of the 8th International Symposium on Ecohydraulics 2010

【国際ワークショップ写真抜粋】



辻本教授による開会宣言



講演者が参加した前日の現地視察



GALAT 博士



中村教授



GLENN 博士



MENZIES 氏



ケーススタディのひとコマ



パネルディスカッション

【生物多様性保全に向けたアピール：行動計画】

“Ecosystem-Science and –Engineering Approach toward Conservation of Biodiversity”

An Appeal from the Ecology and Civil Engineering Society (ECES)

May 2010

Action Plan:

We strive to carry out action aimed at conserving biodiversity through achieving river basin complex in harmony with nature around three core elements: conservation and restoration of critical ecosystem drivers that influence composition, distribution and maintenance of habitat mosaics, evaluation and rehabilitation of water/material flux networks that link them, and the system (governance) that implements them and the “responsibility of metropolitan leadership” to support them.

*We take as our model the Ise Bay river basin complex. This region has characteristics that are valuable in terms of geology and the evolutionary history of life as well as ecology, and the region supports cities that are the nucleus of human activities. These human activities have concentrated economic power, knowledge, and technology in the cities particularly in the metropolis and, at the same time, caused ecosystem degradation such as the loss of biodiversity. With a core comprising the three elements of conserving and restoring landscapes, rehabilitating water/material flux networks, and exercising the responsibility of metropolitan, we will implement action meant to achieve river basin complex in harmony with nature through a challenging approach from ecosystem-science and -engineering and disseminate the results.*

## 6 行事予定

### 6.1 第2回 フィールドシンポジウム in 仙台 都市河川の自然創生を考える ～広瀬川の清流を守る取り組み～

応用生態工学会 仙台

橋本正志 (株) 復建技術コンサルタント

応用生態工学会 仙台では、第2回目の全国版フィールドシンポジウムとして、「都市河川の自然創生を考える」をテーマに、広瀬川の清流を守る取り組みに関する現地見学・講演会を平成22年7月1日(木)～2日(金)の2日間実施致します。本シンポジウムは(社)建設コンサルタンツ協会の継続教育(CPD)の認定プログラムとなっています。奮ってご参加下さい。

#### ① 開催期日

平成22年7月1日(木) 現地見学会(広瀬川中流域)

7月2日(金) シンポジウム

場 所: 仙台青年文化センター

主 催: 応用生態工学会 仙台

協 賛: 東北環境アセスメント協会

後援(予定): 国土交通省東北地方整備局、宮城県、  
仙台市、(社)建設コンサルタンツ協会東北支部

#### ② スケジュール

##### 【7月1日(木): 現地見学会】

##### ◆現地見学会(定員: 40名)

仙台駅西口バスプール集合(12:45)→アユの遡上(郡山堰魚道)→中州・寄州の撤去→石河原の創出(澱地区)→交流会会場(17:00)

##### ◆交流会(KKRホテル仙台: 仙台市青葉区錦町1-8-17)

TEL: 022-225-5201)

市営地下鉄 勾当台公園駅: 徒歩 7分, JR仙台駅: 徒歩 15分

##### 【7月2日(金): シンポジウム】

##### ◆趣旨説明……………9:40～9:45

大村 達夫(東北大学大学院工学研究科 教授)

##### ◆基調講演……………9:45～10:45

「(仮)多自然川づくりの現状と課題」

萱場 祐一((独)土木研究所 自然共生研究センター)

##### ◆事例・研究発表(変更の場合あり)…10:45～12:05

##### 1) 広瀬川の清流を守る条例について

淀川 晋一(仙台市建設局河川課広瀬川創生室 室長)

##### 2) 広瀬川の土砂輸送特性について

真野 明(東北大学大学院工学研究科 教授)

##### 3) 広瀬川の水質について

西村 修(東北大学大学院工学研究科 教授)

##### 4) 広瀬川とのかかわり方

谷田貝 泰子(特定非営利活動法人

水・環境ネット東北)

#### ◆パネルディスカッション(13:00～15:10)

座長: 大村 達夫(東北大学大学院工学研究科 教授)

パネリスト:

萱場 祐一((独)土木研究所 自然共生研究センター  
センター長)

西村 修(東北大学大学院工学研究科 教授)

竹門 康弘(京都大学防災研究所 准教授)

久保田 裕(宮城県土木部河川課 課長)

淀川 晋一(仙台市建設局河川課広瀬川創生室 室長)

高橋 万里子(特定非営利活動法人

水・環境ネット東北)

#### ③ 参加費

●現地見学会 1,000円(参加費)

●シンポジウム 500円(資料代)

●交流会 5,000円(参加費)

#### 【シンポジウム会場と交通】

●会 場: 仙台市青年文化センター

〔〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5〕





- 交通：仙台駅から市営地下鉄・泉中央方面行き10分、  
「旭ヶ丘駅」下車、東1番出口より徒歩3分

#### ④ 申込み・問合せ先

- 添付申込み用紙に記入の上、ファックスして下さい。同等内容のEメールでも受け付けます。
- 締め切りは平成22年6月25日（金）です。
- 問合せ先：応用生態工学会 仙台  
〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-7-25  
復建技術コンサルタント内(橋本正志, 佐藤高広)  
TEL：022-217-2024・FAX：022-217-2036  
E-Mail：masasih@sendai.fgc.co.jp:  
学会URL：http://www.ecesj.com/J/index.html

## 6.2 淡水魚保全シンポジウム 三重県明和町大会

～水辺のやさしい関わり方をもとめて～

主催：明和町大会実行委員会

日時：平成22年8月5日（木）13:00～17:00

場所：三重県明和町中央公民館

(三重県多気郡明和町大字馬之上 944-6)

参加費用：無料

### ① プログラム

#### 【第1部 基調講演】

プラチヤー・ムシカシントーン博士  
(タイ国カセートサート大学)

#### 【第2部 話題提供】

- (1) 子供からみた三重県祓川の環境保全活動
- (2) 地域住民による祓川の環境保全活動
- (3) ネコギギのすむ川
- (4) 連携によるヒナモロコの保全

#### 【第3部 ポスター発表（約30題）】

#### 【第4部 パネルディスカッション】

### ② 申込方法

7/5 までに参加申込が必要です。当日参加はできません（先着 300 名）。

シンポジウム申込先：明和町役場 政策課

TEL 0596-52-7112 FAX 0596-52-7133

E-mail n-katou46@town.mie-meiwa.lg.jp

\*申し込み期限：平成22年7月5日（月）

## 6.3 マングローブ・河口干潟の保全とその技術

### フィールドシンポジウム

応用生態工学会・那覇  
宮良 工 (財) 沖縄県環境科学  
センター 総合環境研究所

平成21年度に設置された応用生態工学会・那覇では、2010年3月に実施した「沖縄地方の河川・干潟・マングローブの保全に関する研究会」を受け、2010年度のシンポジウムとして、以下の現地見学会・シンポジウムを企画しました。講演内容等、調整中の部分もありますが、詳細は学会ホームページ、8月発行のニュースレターでも紹介して参ります。

### ① 開催主旨

沖縄島では大規模なマングローブ林が現存する億首川をフィールドとして、地元生活者、生物系研究者と河川工学系研究者を講師として招聘し、ダム建設とマングローブ保全、河川整備とマング

ローブ保全をテーマとした課題を整理して今後の研究活動に活かし、一般及び関連行政に応用生態工学実践の重要性をアピールするとともに、地域生活者との交流を通して地域資源としての億首川を中心としたマングローブ・干潟の保全の重要性を発信することを目的とする。

## ② 開催者

主催：応用生態工学会・那覇

共催：財団法人 沖縄県環境科学センター、リュウ  
キュウアユを蘇生させる会

後援：(調整中)

## ③ 開催日程・場所

### 【開催日】

○ 平成 22 年 8 月 20 日 (金), 21 日 (土)

### 【開催場所】

1) 現地観察会

○ 億首川, 億首ダム, 漢那福地川等

2) 懇親会

○ 金武町ネイチャーみらい館 コテージ

3) シンポジウム (最大 40 名, ※講演内容未定)

○ 金武町ネイチャーみらい館 視聴覚室 (40 名)

### ■金武町ネイチャーみらい館

〒904-1201 沖縄県金武町字金武 11818-2

TEL : 098-968-611

HP : <http://nature-kin.com/>

## ④ 内容

### 【現地観察会】9:00~16:00

- 1) マングローブ植生について
- 2) 底生動物による健全度について
- 3) 地形について
- 4) その他

### 【シンポジウム講演内容】(※内容変更の場合有り)

- 1) マングローブ林の成立条件と億首川のマングローブ  
中須賀 常雄 (琉球大学農学部教授)
- 2) マングローブ林の水産上の役割と億首川のマン

グ

諸喜田 茂充 (琉球大学名誉教授)

3) 億首川のマングローブ林と地域のみらい

外間 慎仁 (ネイチャーみらい館理事長)

4) 億首ダムにおけるマングローブ林を指標とした正常流量の考え方

北部ダム事務所鍵田環境課長

5) マングローブによる河口水温の保全とその効果

大槻 順郎 (九州大学大学院工学府)

6) マングローブ林における土砂動態・物質輸送

赤松 良久 (山口大学大学院理工学研究科 准教授)

7) マングローブ林の保全と管理

鎌田 磨人 (徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス  
研究部教授)

### 【総合討論】

○ コーディネーター：鎌田磨人 徳島大学教授

○ パネリスト：5 名程度

## 6.4 第 3 回 近畿現地ワークショップ in 淀川

ー現地で応用！生態工学 「河川下流域の管理と課題」～干潟・ワンドの応用生態工学～ー  
応用生態工学会・大阪  
厨子和典 ((有)水技研)

【フィールド】 淀川 (大阪府)

【実施時期】 9 月上旬 (2 日間)

### 【開催主旨】

第 1 回の河川上流・源流, 第 2 回の河川中流に引き続いて, 第 3 回の近畿現地ワークショップは, 河川の下流域をテーマに開催します. フィールドは近畿地方を代表する河川である淀川とし, 現地における干潟, ワンドなどの視察, ワークショップにおける研究発表, 講演などを通して, 河川下流域の現状と課題, 最新の取り組みなどについての知見に触れ, 今後の応用生態工学的な取組の方向性について議論する場を目指します.

## 7 編集後記・事務局から

### 7.1 今後の予定

|                                                                  |
|------------------------------------------------------------------|
| 6.17 第 44 回幹事会 (麹町：弘済会館)                                         |
| 6.22 多自然川づくり 第 1 回研修会 中予地区<br>(後援：応用生態工学会松山)                     |
| 7.1~2 フィールドシンポジウム in 仙台 (応用生態工学会 仙台：仙台青年文化センター)                  |
| 7.7 第 53 回理事会 (麹町：弘済会館)                                          |
| 7.13 多自然川づくり 第 1 回研修会 東予地区<br>(後援：応用生態工学会松山)                     |
| 7.28 第 3 回札幌大会実行委員会 (札幌：かでる)                                     |
| 7 月 平成 23 年度 金沢大会 第 1 回大会実行委員会開催予定                               |
| 8.3 多自然川づくり 第 1 回研修会 南予地区<br>(後援：応用生態工学会松山)                      |
| 8 月 ニュースレター49号発行                                                 |
| 8.19~20 応用生態工学会 那覇 松山沖縄地方の<br>河川・干潟・マングローブの保全に関するフ<br>ィールドシンポジウム |
| 8.31 多自然川づくり 第 2 回研修会 中予地区<br>(後援：応用生態工学会松山)                     |
| 9 月上旬 第 3 回近畿現地ワークショップ in 淀川<br>(大阪：淀川)                          |
| 9.21 第 14 回札幌大会 エクスカーション                                         |
| 9.22 第 14 回札幌大会 エクスカーション、研究<br>発表 (ポスター)、自由集会 [委員会]              |
| 9.23 第 14 回札幌大会 研究発表(口頭)、分科会、<br>自由集会、懇親会                        |
| 9.24 第 14 回札幌大会 公開シンポジウム [役<br>員会、総会]                            |
| 9.28 多自然川づくり 第 2 回研修会 東予地区<br>(後援：応用生態工学会松山・予定)                  |
| 10.1~2 第 9 回北陸現地ワークショップ in 富山<br>(応用生態工学会 富山：富山県立大学)             |
| 10 月 11-29 日 COP10 (生物多様性条約 第 10<br>回締約国会議)                      |
| 11 月 応用生態工学会福岡 地域事例報告会：福岡<br>市内 (予定)                             |

※応用生態工学会 東京・広島は、活動計画を検討中

### 7.2 学会活動 近況

2010 年度最初の大きな行事である「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ」国際ワークショップが開催され、「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ (アピール文)」を採択し、盛況のうちに無事終わることができました。改めまして、ご講演頂いた方々、後援・協力頂きました関係機関の皆様に、厚く御礼申し上げます。

今後は、本年 10 月の COP10 に向けて、採択したアピール文を広く国内外に発信し、流域圏の「景観・生息場の保全」「水・物質フラックスネットワークの健全化」「都市の責任」の重要性について、関係機関への情報の提供と連携の強化を進めて参ります。



事務局では、住所・連絡先変更の届け出がなかった会員への連絡・確認を進め、本年 3 月に概ね会員の皆様の登録情報の更新が完了しました。会員数も平成 20 年度末は初めての減少となったものの、平成 21 年度末には、設立以来、最も多い会員数 1,241 人となりました。また、減少が続いてきた賛助会員数・加入口数も、やっと減少傾向改善の兆しが見えてまいりました。

|       | 総数    | 正会員   | 学生  | 名誉 | 賛助<br>(口数) |
|-------|-------|-------|-----|----|------------|
| H19 末 | 1,211 | 1,099 | 109 | 3  | 37 (58)    |
| H20 末 | 1,169 | 1,091 | 75  | 3  | 33 (50)    |
| H21 末 | 1,241 | 1,141 | 96  | 4  | 33 (50)    |

今後は理事・幹事、各委員会の委員等の学会関係者が一体となって、応用生態工学の普及・確立と会員の皆様が当学会に所属する意義・メリットの充実を図るべく、中期計画を策定し、具体的な施策・活動を進めて参ります。

今後とも学会の活性化、活発な活動に向けた会員の皆様のご支援・ご協力の程、よろしくお願いいたします。  
(事務局：仮谷伏竜)

.....

[平成 22 年 6 月 11 日現在会員数]

名誉会員： 4 名  
正会員： 1,109 名  
学生会員： 93 名 合計 1,206 名  
賛助会員： 33 法人 (49 口)